

# 日本のヒップホップ再考

## ヒップホップのマッピング

- ▶ 曖昧なローカリティ
- ▶ インナーシティーvs主流社会／ニューヨーク
- ▶ 東海岸（ブロンクス・クイーンズ）
- ▶ 全米→アメリカ（東海岸・西海岸）
- ▶ 世界→アメリカvs世界

## 90年代ローカル・ヒップホップの諸相

### 東京

#### アメリカへの接合

- ▶ 輸入盤店の乱立、DJブーム
- ▶ デジタルテレビの多チャンネル化：MTV

#### 国内での象徴闘争

- ▶ イギリス（パンク、ニューウェーブ）経由のスタイル的な情報が先端的に感じられた
  - ▶ 《サブカル》的土壌に接合→音楽から入る
- ▶ アメリカ発ヒップホップについては、身体的かつローファイな部分へのシンパシー
  - ▶ 《ディスコ》的土壌に接合→ブレイクダンスから入る

#### マス対コア+1

- ▶ サブカル指向：TINY PUNX、ECD、SDP、カセキサイダー
  - ▶ 《ハードコア》はそもそも相手にせず
  - ▶ 渋谷・パルコの舞台設定
    - ▶ 90年代後半には離脱・静観
- ▶ ハードコア指向：マイクロフォンペイジャー、ECD、キングギドラ
  - ▶ 《サブカル》に対する強い敵愾心
  - ▶ 原宿・ホコテン
    - ▶ 90年代後半に渋谷に侵入。宇田川町レコ村
- ▶ J-Pop指向：EastEndxYuri
  - ▶ 1995年の「Da.Yo.Ne」がSDPの「今夜はブギーバック」とかぶり、一緒くたに語られる傾向が強いが（→マス対コア）、EastEnd自体はむしろハードコアよりの立場取りのキャリアコース
    - ▶ 所属レーベルもFileで、ライムスターやペイジャーと同じ。ただしFileはエピックのサブレーベルで、アイドル市井由理を使った企画に《利用》された
  - ▶ 《サブカル》よりのSDPの場合、「…ブギーバック」後もラップグループとしてキャリアを継続出来たのに対し、EastEndの場合はほぼ完全に道が閉ざされてしまった

### パリ

#### アメリカへの接合

- ▶ 郊外の移民世帯では、故郷の情報が直接入るため、衛星テレビとVCRの普及が主流社会より早い
  - ▶ 移民二、三世は故郷の番組よりMTVなどを視聴
- ▶ 仏文化・通信省の実施した放送メディアへの内容規制（外国語楽曲の規制）への反発
  - ▶ メディア露出を狙う米ラッパーとの共同作業が増加する

#### 国内での象徴闘争

- ▶ ポストパンク、ワールドミュージック系の業界関係者がチャールズ・エーハンやファブ5フレディーらと交流→仏語の12インチ「Change the Beat」（スクラッチの有名ネタ）→メディアを動員出来る人脈

- ▶ 郊外の若者たち
  - ▶ MCやDJは理解不能。ブレイクダンスから入る→アラブ系の若者の間で流行っていたディスコ・ファンクと接合
- ▶ インテリ層
  - ▶ パリ第8大学で、アメリカ黒人音楽講座→学術的な米ラップ研究書も早期に出版（1990）

### 3つの指向

- ▶ クール指向：MC Solaar、IAM
  - ▶ MC Solaar：大学で哲学を学び、パリ第8大学の講座にも出席。リリックは詩的な言葉遊びが多く、トラックも余裕のある、柔らかい作り
    - ▶ 当時のフランスのマスメディアにおける黒人表象に対する知的反逆
  - ▶ IAMはマルセイユ（オクシタン）出身：当初トルバドールの伝統などと重ねあわせられ、ワールドミュージック方面からも注目
    - ▶ マルセイユの綴りの頭をマルス（火星）に読み替えた独特の世界観
- ▶ ハードコア指向：NTM、Assassin、IAM
  - ▶ パリ北郊のセーヌ・サン・ドニ県を始めとする郊外都市でボッセが形成される
    - ▶ フランス社会における人種差別や階級間の不平等を糾弾
    - ▶ 数度に渡り警察や政府に訴えられる
    - ▶ フランスの移民社会は多文化的であり、黒人系移民はむしろ上層→MC Solaarは仏主流社会への同化の象徴
- ▶ ヴァリエテ指向：Stomy Bugsy、Doc Gyneco
  - ▶ 元々はハードコア・グループMinistère A.M.E.R.のメンバー。Ministère A.M.E.R.が歌詞内容を巡る訴訟の末活動停止となったため、ソロキャリアを開始
    - ▶ メジャーレーベルがハードコア・シーンだけでの認知を拡大
    - ▶ 攻撃的なハードコア・ラッパーから、「ワルの天使」・「愛のギャングスタ」へ
  - ▶ 政府の放送メディア規制により大手FM局がラップに専門化した帰結でもある

---

## ヒップホップはどこへ行ったのか

- ▶ 多様化、拡散化に規則性はないのか？

### 南田理論の援用

- ▶ アウトサイド指標→90年代（熱かった時代）への執着
- ▶ アート指標→SLAM・ポエトリーリーディングへの接近
- ▶ エンタテインメント指標→スタイル化、音楽産業側の方法論固着化

### 中間的卓越化？

- ▶ 既存の三指標から相対的に自律した立場取り・性向
  - ▶ 売れ線は狙わない（他にメインの収入源）
  - ▶ 超越的な正統性供給源としてのアメリカへの無関心（足元・地元の生活感・現実感）
  - ▶ 既存のレコード会社と契約する必然性の希薄化
  - ▶ 卓越した自己表現という幻想への失望
- ▶ ジェローム・ギベールの理論考察の援用
  - ▶ そもそも、ポピュラー音楽《場》においては、ブルデューの言うようなオフィシャルな《経済》以外の多様な経済（非物質経済、非商品経済、名誉資本、闇労働……）が錯綜している。これが、00年代以降前面化し、（一時的にせよ）新しい卓越化指標を可能にしているのではないか？→多元経済、社会・連帯経済（ESS）
    - ▶ 制作コストの極端な低下
    - ▶ DIY・NPO文化の興隆
    - ▶ ポピュラー文化への公共資金投入